



読書感想文コンクール  
**わたしの漱石、  
わたしの一行**

---

**中学生の部**

最優秀賞 .....	13
優秀賞 .....	14
朝日新聞社賞 .....	16
紀伊國屋書店賞 .....	17
新潮社賞 .....	19
早稲田大学賞 .....	20
佳作 .....	22

**高校生の部**

最優秀賞 .....	35
優秀賞 .....	36
朝日新聞社賞 .....	38
紀伊國屋書店賞 .....	39
新潮社賞 .....	41
早稲田大学賞 .....	42
佳作 .....	43



## 「孤独」の音

日本女子大学附属中学校 1年

野村 萌乃佳

作品名 『吾輩は猫である』

選んだ一行

呑気と見える人々も、心の底を叩いてみると、どこか悲しい音がする。

人間の視点ではなく猫の視点で描く『吾輩は猫である』。この本で私の心に深く突き刺さった一文がある。それは「呑気と見える人々も、心の底を叩いてみると、どこか悲しい音がする」という文だ。悲しみを形にしたもの、それは涙だ。しかし涙を流していないからといって悲しんでいないわけでもない。悲しみをまぎらわせるために何か別の事をする人もいるし、心の奥底に悲しみを閉じこめる人もいる。この文でいう「呑気な人」も呑気をよそおっているだけで心の底では深い悲しみにくれている事もあったかもしれない。又、この文を「悲しい音がする」と書き「悲しんでいる」と書かなかったのは「今」悲しんでいなくても過去の悲しみがまだ残っている

る人へ向けて何かを訴えたかったからではないかと思う。そこで、漱石が何を訴えたかったのか考えてみるとすぐ後の文で手がかりを得られそうなものがある事に気がついた。「迷亭君の世の中は絵にかいた世の中ではない」。私なりに解釈してみると、自分で描いた理想が現実になる事はないということになった。私はそうして考えているうちに、人生は自分の思い通りにいかず悲しんだり苦しんだりする時もあるという事を伝え、それと同時に喜びや楽しさを知ってほしいという漱石の思いがこの一文にこめられているのではないかと一つ一つの考えに行きついた。私はこの一文を漱石の訴えだとしてそこには色々な感情が絡んでいると考えたが、人によってさまざまならえ方ができると思う。そして、そういった所が面白いと思う。この文章を読んでいると漱石が「音」に例えたところは本当に音が聞こえるように思えてくるのが不思議だ。私の思う悲しい音は一回きりの少し低めの音が何度もこだまする音だ。即ち、「孤独」である。言葉で表しきれないものも音でなら表せると聞いた事がある。だから音は素晴らしいと。しかし私はこの漱石の文章を読み、読み手に自由を与えながらもある程度自分の意見も述べるといふ、絶妙なバランスがとれている文章こそが最も素晴らしいと思うようになった。

漱石の文章は先入観にとらわれる事がなく自由だ。するとそんな文章を読んでいる自分まで今までの先入観が無くなり、自由な考えを持てるようになっていくのだ。実に不思議な魅力が漱石の文章に

はある。今までは宮沢賢治や太宰治、そして夏目漱石などの有名作家が書く文章は堅苦しいもの、そういう勝手な思い込みがあったので今素直にそう思っている事に、自分でも正直驚いている。読みはじめは渋々だったにしろ、私はこの『吾輩は猫である』から多くの事を学べた。だから今後もし先入観にとらわれる事なく、沢山の本に出会い多くの魅力を知りたい。

#### 審査講評

選んだ一行が心を捉えた理由をうまく説明している。漱石の文章の秘密をも明らかにする論旨は見事。「孤独」についての考察が鋭く、タイトルを『『孤独』の音』とした点もすばらしい。

《中学生の部》

優 秀 賞

温かい存在

日本女子大学附属中学校 1年

小菅 愛乃

作品名 『坊っちゃん』

選んだ一行

何だか清に逢いたくなくなった。

「何だか清に逢いたくなくなった。」この短い一文が、『坊っちゃん』を読んだ私の心に一番深く残った言葉である。

坊っちゃんは東京にいる間、自分を親よりも可愛がる清を理解することができず、不審だとさえ感じていた。教師として松山に赴任して、清から離れたとき、やっとそのありがたみを知る。

町内ではつまはじきにされ、両親さえも愛想を尽かしている。坊っちゃんはそのような大切に扱われない環境に慣れようと、「自分を褒めてくれる・認めてくれる人なんていない。」あるいは、「いらぬ。」と思いついていたのではないか。だから、清の優しさも素直に受け入れることができなかつたのだと思う。清が、「あ

あなたはまっすぐでよいご気性だ。」と感心するのもお世辞だと考え、自分が持っている良さに気付けなかったのである。

松山での生活は、それまでの東京の暮らしとはかけ離れており、毎日たくさんの悩み事を抱えていた。特に、人間関係の問題だ。何かあるごとに思い出されるのは、清のことであった。そうして、じっくりと清について考えていくうちに、坊っちゃん自身に与えてくれた清の無条件な愛情を理解する。

坊っちゃんがしばらく清と別れ、たくさんの人々の中で過ごしたのは良いことだっただろう。そこで揉まれていったからこそ、自分の良さを認めることが出来たのだ。そして、自分の良い所を見抜いて愛情を注いでくれていた清に感謝することができたのだから。

私の心に残った一行は、清の本当の思いを理解したときの坊っちゃんの気持ちを素直に表したものである。「何だか清に逢いたくなくなった。」この坊っちゃんの言葉から、清の温もりが伝わってくると感じる。人は人の温もりから離れたとき、あるいは独りになったときに、その人を包んでいた温かみのある存在に気付くのだ。坊っちゃんにとっての温かい存在・清への思いが、坊っちゃんが清に逢いたくなくなったときの一言に、全部詰まっている。遠く離れ、清の真心からの忠誠心と温かさをしっかり理解したことで、坊っちゃんの心と清の心が本当に繋がりは合ったように思えた。

私は、人生には清のように、自分を理解して支えてくれる温かい存在というものが必要だと思う。人間は皆、心が弱い。挫けそうに

なったとき、挫けたときに、その人の心や気持ちにそっと寄り添ってくれる誰かがいるから、人は生きていけるのである。

坊っちゃんにとっては清がいたから、清にとっては坊っちゃんがいたから、二人とも満足な人生が過ごせたのだろう。

#### 審査講評

何気ない短文を選び、その理由を考察し、魅力的に説明している。坊っちゃんにとって清が「温かい存在」であるだけでなく、清にとってもそのような存在であったことを的確に読み取った点も評価できる。

記 憶

筑波大学附属中学校 2年

浅見 茉莉奈

作品名 『こころ』

選んだ一行

記憶して下さい。私はこんな風にして生きて来たのです。

本屋さんに並べられているたぐさんの背表紙、その中で『こころ』という文字に目が留まった。目に留まったのに深い意味はなかったが、日本語ってなんて美しいのだろうと、そのたった三文字に感動した。

読み始めると、綴られている言葉のひとつひとつが、私のこころの中にすんと落ちてくるような感じがした。それなのに何度も何度も読み返したくなる。ずっと読んでいたくなる。そんな文章に私は初めて出会った。

血のつながりも何もない、ただ海岸で出会っただけの青年である「私」に、彼に「先生」と呼ばれる主人公は、今まで誰にも、そし

てこれからも打ち明けるつもりがなかった自身の過去を手紙で告白する。

「記憶して下さい。私はこんな風にして生きて来たのです。」

何気ない一文だが、私はこれに先生の覚悟や思いが全てつまっているような気がしてならなかった。何かはっとさせられるものがある。言葉とはこんなに深い背景をもつものなのか。そんなことを考えた。

先生は「私」に自分の経験から得たものを教えるでもなく、そこから学びとってほしいというわけでもなく、ただただ「私」が自分のこころに留めることを望んだ。

「記憶」とはよく使う言葉だが、本当はそんなに簡単に言い表せるようなものではない気がしてきた。脳で考えて引き出してくるものではなく、いつでもこころの奥底にあって、ふとした瞬間に大切なこととして取り出すことができるもの、それが記憶なのではないだろうか。

ずっと独りで苦しみぬいてきた過去というものを私は持っている。私の周りで死んでいった人もいない。せいぜいハムスターだ。そんな私のところにも鐘を打ちつけたような衝撃を与えたこの作品。大人になって、様々な経験をしてから読んだら、どんな風に感じるのだろうか。今から楽しみで仕様がなない。

信愛している人がいる、しかしそれ以前にその人は自分が信用することのできない「人間」なのだ。最初は意味が分からなかった。

しかし、読み終えてからもう一度その矛盾を考えたとき、そんな悲しいことがあるのだろうかと思った。私の人生の中でそんなことを思う日がくるのだろうか。きてほしくもないが、私は今こうしてそういう気持ちがあることを知ることができている。

まさに人間の「こころ」を映し出したような作品だ。それは、少なくともまだ十数年しか生きていない私には到底想像もできない、たった三文字では表すことのできないような、美しく、儂い「こころ」の形だった。

また、これを読んだという「記憶」も、私の心の中に一生残るものになるのではないかとという予感が、今から感じられずにはいられなくなってきた。

#### 審査講評

「こころ」という三文字から、言葉の持つ力を解き明かしている。「記憶」の深い意味にまで思索を進め、オリジナリティーを感じる。

《中学生の部》

紀伊國屋書店賞

### 時に潜む力

新宿区立四谷中学校 2年

上田 倫子

作品名『硝子戸の中』

選んだ一行

「時」は力であった。

「時」は力であった。

この文に出会ったとき、私は大きな衝撃を受けた。『硝子戸の中』で漱石は、自分の旧家を訪れて幼少期を過ごした家や町の変わり様を初めて知った際この文を書いたようだが、『時』は力であった。とはどういうことなのだろうか。時というのは常に流れ続けているもので普段は気にも止めないような当たり前のものである。だが、そこに「力」があると漱石は言うのだ。時の「力」。そう考えたとき、私の頭の中に、ある出来事がよぎった。

三月のある日、私が家族といつものようにテレビを見ながらくつろいでいた日曜日の夜、一本の電話が鳴った。その電話は、京都に

住む祖父が吐血して倒れ、意識不明で救急車で運ばれたことを知らせるものだった。その知らせを聞いたとき、私は目の前が真っ暗になった。私の頭の中はとても混乱していて、なぜ祖父が倒れたのか、それが全くわからなかったのだ。祖父は足の悪い祖母と二人暮らしで、最後に会った正月休みの時はいつもと変わらぬ、誰よりも元気な祖父だった。スーパーへ自転車で買い物に行ったり、庭の畑の土作りから水やりまで全てひとりやり、獲れた野菜を送ってくれたりするような、そんな元気な祖父の姿だけを見ていた私には、祖父の元気の良さが当たり前になっていて、ずっと変わらないものだと思っていたのだ。その翌日は学校があったため、いつもと同じように過ごしたが、祖父のことが心配でたまらなかった。そして、その日の夜、祖父の意識が回復したとの連絡がきたとき、心の底からほっとしたのだが、それと同時に、祖父が倒れたと聞いたときに覚えた驚きと衝撃を忘れることはできなかった。祖父は私から見れば、「いつも変わらず元気なおじいちゃん」であり、いわば永遠の存在になっていた。しかし、その祖父も、時と共に確かに老いていたのだ。時間は確実に止まることなく流れ続け、目に見える全てのものを変化させていく。そうした力を時の力と漱石は呼び、その時の力の大きさを簡潔な言葉で表したのである。

死の一年前となる大正四年にこの作品を記した漱石は、取り壊されていく家や町を自分に迫る「死」と結びつけて捉え、この一行にそれらの変化に対する思いを込めたのではないだろうか。人々は

日々意識することは無いが、時の流れと共に訪れ続ける小さな変化の積み重ねを、何かのきっかけによって初めて知るのだ。その時、私たちは「時」の力を知り、過去の一分一秒、全ての瞬間が、いかに尊いものであったかを思い知らされる。いつか直面するであろう大切な者との別れによる悲しみをどう乗り越えれば良いのか、それはまだわからない。だが、「時」には苦しみや悲しみを洗い流し、癒してくれるという力もある。それを信じ、私たちがすべきことは、漱石の残したこの一行を胸に刻み、すべての時間を、限りのある貴重なものとして大切に過ごしていくことではないだろうか。

#### 審査講評

「時」の一語を出発点にし、自分の体験を見つめ直しながら、人生と「時」をめぐるしっかりとした理解を書いている。「時」の持つ力をよく表現している。



「今」を生きる

新宿区立牛込第二中学校 3年

小笠原 千咲

作品名『三四郎』

選んだ一行

じつは彼と時を同じゅうして生きている我々はたいへんな幸せである。

「じつは彼と時を同じゅうして生きている我々はたいへんな幸せである。」

これは、私が『三四郎』を読んで最も深く考えさせられた、心に残る一行です。この言葉は、三四郎と同じ大学の与次郎が三四郎と寄席へ行った帰りに言っていた言葉です。小さんのことをほめると同時に、今から少しまえに生まれてもおくれても小さんに出会えなかったことを話しています。私はこの与次郎の言葉を聞いて「出会い」について深く考えさせられました。

私たちは生きていくうえでたくさんの人と出会います。家族、友

達、先生、地域の人、その他にも、旅行先で行ったお店の店員さんやテレビに出ている芸能人など、数えきれません。そんな一人一人との出会いに感謝したこと、感動したことはあるでしょうか。ほとんどの人は、そんなことを考えずに生活しているのでは、と思います。現に私もそんなことを考えたことなかったし、それが普通だと思っていました。しかし、与次郎の言葉を聞くと「普通ではないのかもいけない。」と思いました。

例えば、私が今過ごしているクラス。このクラスになったのは、皆が同じ年に生まれて近所に住んでいて、そしてこの学校を選んだからです。そう考えてみると、今を生きている中で出会った人皆にも似たようなことが言えます。偶然出会った店員さんだって、今の時代に生まれてその場にいなかったら出会うことなど一生なかったことでしょう。今とても仲良くしている友達だって、生まれた年が一つ違ったら、もしかしたら出会うこともなかったのかもしれない。そう思ってみたら、今に生まれたことがすごく幸せに思えますし、皆に出会えたこともとても幸せです。偶然がたくさん重なって出会えた皆をとてかけがえのない存在に思えます。そして、その偶然の重なりの中からとても深い仲になる人がいると思うと、まさにキセキの連続だな、と感じました。

それと同時にふと浮かんだ疑問があります。それは、「戦争のときに生まれた人は、今に生まれて幸せ、とと思っていたのか。」という疑問です。戦時中に生きていた人たちは、こんな平和が訪れるな

なんて思っていなかったのかもしれないし、その時その時にある小さな幸せを大事にしていたのかもしれない。「こんな時代に生まれてたくなかった。」と思う人もいたかもしれないけれど、皆がそうだったわけではないと思います。未来を知らないのは私たちも同じです。この先どんな未来がくるかなんて、誰にも分かりません。だから私は、「今の時代に生まれて本当に幸せだな。」と思えるように生きたいです。今という時代をつくれるのは私たちだけです。過去から学ぶことは大切だけれど、過去にばかりとらわれず、今としっかり向き合いたいです。

#### 審査講評

意外な一行に触発されて、筆者は家族や友人などに会い、共に今を生きる「奇跡」と「感謝」に思い至る。「わたしの一行」ならではの感想文。

#### 《中学生の部》

#### 早稲田大学賞

### 先生の背中から学ぶ自分らしさ

和洋九段女子中学校 3年

土屋 リカ

#### 作品名『坊っちゃん』

#### 選んだ一行

履歴なんかかまうもんですか、履歴より義理が大切です

この作品は、「親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりしている。」という斬新な書き出しではじまっている。無鉄砲という言葉に辞書でひいてみた。「前後のことをよく考えない、むちゃな様子だ。向こう見ず。」など、あまり感心できる言葉ではなかった。しかし、物語を読み進めるうちに、この言葉には、辞書には書かれていないもう一つの意味、解釈があるのでないかと感じるようになった。

この物語には、赤シャツとよばれる教頭と、野だいこと呼ばれる教師が登場する。この二人が呆れるほど姑息で、それでいて頭が良い。坊っちゃんと同じく数学の教師である山嵐は真っすぐな性格。

当然二人にとっては気に入らない存在であった。二人は、坊っちゃんに山嵐が悪い人間だと思込ませようと企み、坊っちゃんもまたそれを信じかけていた。あのように言葉巧みに語られては、坊っちゃんでもなくとも、きっと山嵐を疑ってしまったであろう。私達の日常の中でも、些細な誤解などにより、誰かを傷つけてしまったり、またそのことにより、自分自身も嫌な気持ちになってしまうようなことがあるかもしれない。そのような時、私達はどうすればよいのだろうか。

二人のやり取りにその答えのヒントがあった。赤シャツとの野だいいこの悪巧みにより不仲になってしまっていた山嵐が、自分の誤りを真っすぐに坊っちゃんに詫びてきたことをきっかけに、二人の誤解が解けた。同時に、赤シャツと野だいいこの度重なる悪巧みに対し、団結して立ち向かえる信頼関係が築かれた。関係が悪くなっていた相手に対し、自分の誤りを認め、深く頭を下げることでできた山嵐と、その謝罪を受け入れ、すぐに仲直りの姿勢を見せた坊っちゃん。人間味のある二人のやり取りに清々しさを感ずると共に、私もまた彼らのような人間でありたいと思った。

後半、以前より煩わしいと思っていたであろう山嵐を、赤シャツらが遂に辞表提出に追い込んできた。坊っちゃんは校長に自分も辞表を提出すると申し出た。君の将来の履歴に関係すると引き止めた校長に「履歴なんかかまうもんですか、履歴より義理が大切です」ときっぱりと言い放った言葉が坊っちゃんそのもののように感じら

れ、私が一番気に入っている一文でもある。

自分のことを「損ばかりしている」と坊っちゃんは言っているが、私はそうは思わない。人の顔色ばかりをうかがい、自分らしさが何処にあるのかわからないような生き方に得と呼べるものがあるのか、むしろ理解が難しい。歯切れのよい坊っちゃんの言葉は、自分の心に素直に従うことの大切さを日々迷いながら生きている私達に教えてくれる。やはり坊っちゃんは、立派な先生であった。そんな坊っちゃん先生と真っすぐに向き合うことのできる、そのような生徒で私はありたい。

#### 審査講評

内容、表現ともに中学生らしさにあふれたさわやかな作品。坊っちゃんの「無鉄砲」の本質を、自分の心に素直に従うことと看破し、見事な一行を選んでいる。

## 「現実世界」と「自分の世界」

新宿区立牛込第二中学校 3年

湯澤 亮介

作品名『三四郎』

選んだ一行

自分の世界と現実の世界は、一つの平面に並んでおりながら、どこも接触していない。

この恋愛小説を読み、ぼくは、明るい気持ちになった。最初に三四郎が上京してくるところから、最後に美禰子が結婚するところまですべてとても面白かった。調べてみると、『三四郎』は今から百年程前に書かれた話らしい。現代とは全く違う日本を見ることができてとてもよかった。熊本から上京するだけでも一日では着かない。また、東京に汽車があったのには驚いた。このように、現代の日本とは違う近代の生活を背景に物語が進んでとても新鮮だった。さて、ぼくは『三四郎』を読み、一番心に残った部分がある。それは、

「自分は今活動の中心に立っている。けれども自分はただじぶんの左右前後に起こる活動を見なければならぬ地位に置きかえられたというまでで、学生としての生活は以前と変わるわけではない。自分の世界と現実の世界は、一つ平面に並んでおりながら、どこも接触していない。そうして現実の世界は、かように動揺して、自分を置き去りにして行ってしまふ。」

という部分だ。なぜ、この部分を選んだかというと、上京してきたばかりの三四郎が東京の劇烈な活動についていけず、この活動に置き去りにされているという状況がよく伝わってきたからだ。また、「現実の世界」と「自分の世界」という呼び方で文章を書いていても面白いなと思ったからである。

ぼくは、上京ではないが、転校などを何度もしているため、三四郎と似たような経験がある。以前、フィリピンに住んでいた時には、文化の違いにより混乱した。フィリピンなので、当然話す言葉は違う。また、買い物の時も売っている物が日本とは違った。ほかにもフィリピンの町なみや人柄も日本と違っていた。だから、僕も最初三四郎のように、「現実の世界」に「自分の世界」がついていくことができなかった。しかし、「住めば都」ということわざがあるように、住む期間が長くなるにつれて、「自分の世界」が「現実の世界」に追いついていった。三四郎も同じだと思う。最初のうちは、都会の劇烈な活動についていけなかったが、次第に慣れて、青春を楽しむようになっていったのだ。

このように、ぼくはこの『三四郎』を読んで、「現実の世界」と「自分の世界」は平面に並んでおきながら、どこも接触していないことが分かった。自分は、なるべく「自分の世界」や「現実の世界」に置いていかれないようにしたいと思う。

## 《中学生の部》

佳作

## 清への想い

新宿区立落合中学校 1年

小笠原 希未

作品名『坊っちゃん』  
選んだ一行

今に返すよと云ったぎり、返さない。今となっては十倍にして返してやりたくても返せない。

夏目漱石の代表作の一つである『坊っちゃん』という作品を読んだ。『坊っちゃん』は、子どものころから無鉄砲で直情性型の坊っちゃんという主人公の話だ。坊っちゃんは、松山の中学校で数学の教師になる。そして手の焼ける生徒たちや、何事も人のいいなりで

あまり仕事にも意欲がない同僚たちと出会う。坊っちゃんは赤シャツとあだ名を付けた教頭との争いを繰り返す。何事にも真っすぐ立ち向かう自分の性格に突き動かされるように赤シャツへの反抗を重ねていく。そして坊っちゃんは、松山の中学校を辞めて、東京へ戻り、電車の技手になった。この話は、坊っちゃんが東京で生まれてからの人生の話だった。

『坊っちゃん』の中で私が心に残った部分は清と坊っちゃんの間わり合いの部分だ。中でも特に心に残った文がある。坊っちゃんが清に三円をもらった時のことを思い出している二文だ。

「今に返すよと云ったぎり、返さない」

「今となっては十倍にして返してやりたくても返せない」

というところだ。清という人物は坊っちゃんが住んでいた家の使用人だ。坊っちゃんは、小さい頃から問題ばかり起していたのであまり両親に可愛いがられていなかった。そんな坊っちゃんの性格を理解し認めてくれた人物が使用人の清だ。この部分が私の心に残った理由は、これは坊っちゃんの現在のことではなく過去の事を書いていて、清への思いがよく伝わったからだ。年老いた清が亡くなった後で清への想いを改めて感じているところだと思う。清は死んでしまっても恩を忘れていないところにとっても感動した。坊っちゃんにとって清は大切な人だったと思った。清にとっても坊っちゃんは大変な人だったのだと思う。

『坊っちゃん』を読んで、題名の理由が最初は分からなかったが、

今は分かるような気がする。坊っちゃんと呼ぶのは清だけだった。清以外の人はみんな「君」などで呼ぶ。主人公の名前は一切出てこない。この話では、清とのエピソードが最初の方にあり、清が死ぬところで話が終わる。清が重要な人物だったから題名が『坊っちゃん』なのだと思う。清を重要な人物にして、題名を『坊っちゃん』にした夏目漱石の考えが分かるような気がした。坊っちゃんはずっと真直ぐな性格をしていたが、そのせいで大変なこともあった。自分の性格や思うことをつらぬくことはとても大変なことだ。そのような精神が大切だということを夏目漱石は伝えたかったのではないだろうか。また、清の言っていた言葉が、夏目漱石の思っていたことなのではないかと思った。

## 《中学生の部》

佳作

### 『坊っちゃん』でこころに残った一行について

新宿区立落合中学校 1年

松元 網大

作品名 『坊っちゃん』

選んだ一行

清はおれの事を欲がなくて、真直ぐな気性だといって、ほめるが、ほめられるおれよりも、ほめる本人の方が立派な人間だ。派な人間だ。

「清はおれの事を欲がなくて、真直ぐな気性だといって、ほめるが、ほめられるおれよりも、ほめる本人の方が立派な人間だ。」この言葉が『坊っちゃん』の中で一番、僕の心に響いた言葉だ。初め、坊っちゃんは清のことを、不審がり、つまらない、等と思っていた。しかし、清と一緒に居ることにより、だんだんと清に対する気持ちが変わっていったのだ。そして、清から離れ田舎に行くことで、やっと清のありがたさに気付くことができたのだ。最初の言葉はその気持ちの象徴といっても過言ではない。



坊っちゃんの清への気持ちの象徴という意味で感動し、最初の言葉を選んだ訳でもあるが、本質は違う。僕が一番心に残ったのは、「ほめられるおれより、ほめる本人の方が立派な人間だ。」

と考えることができる坊っちゃんの性格だ。このように考えることができるのはかなり心が広くなければ無理だ。このように考えられる坊っちゃんは、人として真直ぐで正直だ。

親譲りの無鉄砲さを最初、坊っちゃんは嘆いていたが、無鉄砲だったからこそ、むこうみずだったからこそ、真直ぐになれたのだ。そして、真直ぐでい続けたからこそ、正直にもなれたのだ。そう、坊っちゃんは無鉄砲だったため、真直ぐで正直な人間へとなることができたのだ。

しかし、無鉄砲なだけでは、真直ぐにも正直にもなれない。そうなれたのは、やはり清のおかげなのだ。清にほめられたから、坊っちゃんは真直ぐで正直な無鉄砲へとなれた。だから、清に感謝して、清のことを立派だと考えられるのだ。

清は坊っちゃんを否定する訳ではなく、ほめることにより人としての心を伸ばしたのだ。

これと似たような経験をしたことが僕もある。僕は昔、うそをよこつた。しかし、母はそれを怒らず、こう言った。

「お前は表現がうまいから、それを頑張って生かさないさい。」

この言葉を聞き、僕はあまりうそをつかなくなつた。母に表現がうまいと気付かされたから、表現をすっかりし、うそをつかなくな

つたのだ。

坊っちゃんも清に真直ぐだといわれたことにより、自分は真直ぐだと実感したのだ。

だから、清は坊っちゃんにとって、かけがえがなく、とても大切な人なのだ。このことに気付くことができたから、最初の言葉を僕は選んだのだろうと考える。

## 《中学生の部》

佳作

## 人間らしさ

新宿区立新宿西戸山中学校 2年

藤木 凛

作品名『坑夫』

選んだ一行

そこで汽车租赁はありますとも、ありませんとも云いにくかったもんだから「少しあります」と答えた。

「少しあります」と、答えたのは、人間としての性だと思う。だから私も、同じ問いかけをされたら、迷い、少しの見栄を張るだろ

う。

「ある」と答えた場合と「ない」と答えた場合。ただ「ある」と答えただけでは全くおもしろくない話になると私は思う。そこで、「ある」と答えた場合と、「ない」と答えた場合の気持ちを考えてみた。

まず、「ある」と答えた場合。この答えだと、自動車賃はあるという事で、うそをつく事になってしまう。しかし、うそをつき、「ある」と言ってみる見栄を張りたい気持ちもあるのではないか。そうすると、うそをついた事によって、後から自分はずかしめに合わなければいけないから「ない」と言おう。私は、この矛盾している二つの気持ちを「ある」と答えた場合の気持ちとして考えた。

次に、「ない」と答えた場合。この答えだと、少しはあるが、自動車賃すべてはないという事で、素直に事実を言うことになる。しかし、「ない」と言えば、自分はお金がないと思われるうえに、ずうずうしい人間だと思われるのではないか。ならば「ある」と言ってしまうか。私は、この二つの気持ちを考えた。

この、「ある」と「ない」と答えた場合について考えると、二つの気持ちが出てきてどちらも矛盾している。答えた人は、この二つの答えのどちらを答えるわけでもなく、「少しならある」と答えた。あるというのは本当の事で、少しというのも本当。でも、自動車賃には足りないの、「なら」という言葉を付けた。考えぬいた結果、少しの見栄を張り、「ある」の方にしたのだ。

私は気持ちを考えてみて、あいまいな答えを出すというのは、日本人の特徴の一つだと思う。相手を思いつつ、自分の事もしっかりと考える。私はこの考え方が好きだ。良いとも悪いとも言わないこの考え方が。この言葉もそうだ。あいまいな答えを出せるのは、日本人しかできないし、小説に書くのも日本人にしかできない。日本人にしかできないからこそ、読んだ日本人と一緒に考えることができるし、共感できるのだと思う。

私は、「少しならある」というこの言葉はすごいと思う。本当に考えていなかったら、出てこない答えだと思うし、この答えだからこそおもしろいのだと思う。そして、日本人らしさがすぐ出てくるのがとても印象的で、こんな小説はいままで読んだことないと思った。私はいつも、はっきりとした答えの小説ばかり読んでいた。しかし、あいまいな答えも良いな、と思えた。だからこの一行が私の心に響いた。



## 夏目漱石が書いた一文から

和洋九段女子中学校 1年

平山 芽衣

作品名『吾輩は猫である』

選んだ一行

「人間というものは時間を潰すために強いて口を運動させて、可笑しくもないことを笑ったり、面白くもないことを嬉しがったりする外に能もない者だと思った。」

私は、猫の視点から小説が書かれているという珍しい書き方に引きつけられ、数多くある夏目漱石の本からこの『吾輩は猫である』を選びました。私はその中で、

「人間というものは時間を潰すために強いて口を運動させて、可笑しくもないことを笑ったり、面白くもないことを嬉しがったりする外に能もない者だと思った。」

という一文が、ずっと心に強く残っていました。

今までの私はどんな些細な話でも笑って相手に合わせ、関係が悪

くならないようにしていました。しかし、それは違うと猫に気づかされたのです。

確かに一度立ち止まって、自分を客観的に猫と同じ立場に立って見てみると、猫の言った言葉に共感できます。相手に合わせている私は、いつも心のどこかで「もし嫌われてしまったら……。」または「けんかになってしまったら……。」などと不安に思っていました。だから、相手が言った事に対して同調する事しかできなかったのだと思います。

しかし、そんなに相手に怖気づいていて、果たして本当の“友達”と言えるのでしょうか。

やはり、私はどんな事でも本気になって相手と言い合える関係、それが“友達”だと思っています。相手の言う事にうなずいているだけの内は、ただの“話を聞いてあげている人”で終わってしまうと思います。

猫は小説の中で、人間が日常で考えている事や行っている事全てに驚き、そして笑っています。それは、人間の言動一つ一つが初めて知る事ばかりで、そのおろかさが際立って見えるからだと思っていました。

猫が言った言葉に私は大きく考えさせられ、そして変わりたいと思いきっかけになりました。

もちろん、相手の話をしっかりと聞くことはとても大切な事だと思います。ですがそれだけではなく、自分の考えを持つことも大切

な事だと思えます。その上で、それを恐れずにもっと自信を持って、相手に伝えていきたいと思いました。また、自分が話をしているときも、相手の考えや思った事を聞く事で、新たな見方や発想ができると思っています。

そうして、少しずつ相手との距離を縮めていき、一人でも多くの、本当の「友達」を作っていきたいと思いました。

## 《中学生の部》

佳作

## 『三四郎』から考える私の世界

筑波大学附属中学校 1年

關 光希

作品名『三四郎』

選んだ一行

三四郎には三つの世界が出来た。

「三四郎には三つの世界が出来た。」

熊本から上京し、都会という今まで経験したことのない新鮮な世界に身を投じた時の言葉だ。この時の三四郎の心の中には、故

郷の平穏であるが寝惚けたようにうつる立退場のような世界と、浮世離れした深遠な学問の世界、そして華やかな世界の中に美しい女性がいる、三四郎にとって最も濃厚な世界がある。三四郎はこの世界をめぐる、様々なところで悩んでいく。特に三四郎は自分の理想と考える「形」に振り回され、憧れながらもそれが一番の重荷になっていると思う。私は読んでいて思ったのは、三四郎は、「コミュニケーションに欠けている」ということだ。頭は良いが、心の中だけで考えてしまっている寡黙な若者だ。特に美禰子の前だと気の利いた話ができない。これは好意の感情を表せないのかもしれないが、読んでいて反応が悪い人だと思った。今までとは違った世界に飛び込み、決して自分の良いようには進まない現実の世界で悩み続ける三四郎は何だか滑稽で面白い。とても親近感を持った。私も今まで生きてきた世界と現在、そして未来を考えてみた。現在の状況をどう上手く進ませていくか、漠然とした将来への希望、進むべき道を考えることがしばしばある。しかし、現在の状況を考えることが心の中のとんとを占めている。私の十二年間の人生の中の過去はまだ平均寿命から考えれば七分の一ぐらいでしかない。過去を振り返れば小学校時代の友達と共有した時間と、その時の様々な思い、それは楽しい思い出の数々で溢れ、まだ色褪せることはない。現在の世界は、中学生としての自覚、初めて足を踏み入れた中学校生活の中での経験、新しい出会いなど今までとは違った何かに会うこともできる場所だ。そして未来。私はこの世界がまだ見えてこない。

そこで考えてみた。時代を経ても人間が成長していく時に考えることは変わらないのではないかと。私は小学五年の後半からよく身内の大人達に、「反抗期」と言われた。他の友達も同じように言われたそうだ。とすれば、三四郎に描かれている世界は、私があと五、六年経つと見えてくる世界なのではないかと。二つ目の世界までは、今の私でも理解できるのだが、どうしても最後の世界を理解することは難しい。異性に興味を感じることも、もう少し大人になれば、美禰子の気持ちの変化や、三四郎の思いが分かるようになるのかもしれない。

「迷羊」

この言葉も気になる。三つ目の世界は、この意味が分かれば、私自身の世界も見えてくるのかもしれない。今の私にとってはミスティアスな世界だ。私の世界はまだ二つしかない。この小説を読んでそう考えた。

《中学生の部》

佳作

## 自分の意思を伝える

日本女子大学附属中学校 1年

秋間 野々香

作品名『坊っちゃん』

選んだ一行

それじゃ私も辞表を出しましょう。

私は、この一文には主人公の性格がとてよく表れていると思った。言葉にかざり気がなく、自分の言いたい事・伝えたい事が直接表されていて、単純でまわりくどいことが苦手な主人公らしい言いまわしだと思う。普通、社会の中でも私達学生の生活の中でも、「間接的な言葉で自分の意思を伝える」というのはよくあることだと思う。きっと皆、それを無意識のうちに行っているのだ。なぜそんなことをするのか。それは、相手を傷つけたり自分が嫌われたりするのを恐れている、もしくはこれから生きていく上での自分の功績や評価に悪影響を及ぼすのを恐れているからだと思ふ。社会で生きていく上で、そうやって直接言わずとも相手に自分の意思を

伝える能力というのは、とても大切だということは私にも分かる。しかし、時にはこの主人公のようにはっきりと言葉に表すことも必要なのではないかと思う。

しかし、誰もが主人公のように自分より目上の人に対し自分の意見を伝える事ができるわけではない。やろうとしてもできないのだと思う。それでは、なぜ主人公はそのみんなができないことを行動に移せたのか。それは、私達が抱えている「恐れ」を、主人公は何一つ抱えてないからだと思う。自分の損得や利益を考えたりせず、相手の為だけを考えてからこそできる行動だ。まわりくどくして、自分の損害などを恐れた変化球を投げる様な言い方をしてしまうと、多くの人達と違い、主人公は自分の意思をしっかりと伝えるために直球を投げた。それはとても勇氣ある行動だと思い、私は主人公をとても尊敬した。

私は、自分が主人公の立場だったらどう行動するかを考えてみた。一か月しか勤めていない学校で一緒に喧嘩を止めに行った人が免職されたとき、はたして自分の怒りの感情だけで自分から辞表を出すことができるのだろうか。私には到底無理だ。一か月で仕事を辞めるなんて根性のないやつだと思われてしまうし、次の仕事を探すときにも必ず影響がでてきてしまう。目上の先生に刃向い、辞表を出し、職を無くすような勇氣は私にはない。やはり一番に考えてしまったのは、自分の利益や損得についてだった。

しかし、常に自分の意思を一番に優先していると、失敗する事も

たくさんあると思う。逆に、後先のことばかりを心配して、自分の意見を言わずにいると、自分の理想とはかけ離れた仕事をする事になるかもしれない。人間関係も仕事もうまくいっている人は、その二つのバランスがうまくとれているのだと思う。これから先私達が成長していく上で、自分の気持ちを押し殺さなくてはいけないことも、しっかりと意見を言わなければいけないこともたくさんあると思う。社会に出たときに困らないためには、今自分の意見を言うべきか言わないべきか、状況によって違うということをよく考えさせられた一文だった。

### 《中学生の部》

#### 佳作

### 欲は果てしないもの

日本女子大学附属中学校 1年

高橋 沙也花

作品名『吾輩は猫である』

選んだ一行

ナポレオンでも、アレキサンダーでも勝って満足したものは一人もないんだよ

人間は一つの欲を満たすと、欲が減るのではなく、逆にもっと欲しい、もっと欲しいと思う。夏目漱石は、『吾輩は猫である』のなかで、人が気にくわないから喧嘩をする、先方が閉口しないから法廷に訴える、法廷で勝っても落着かない、心の落着きは死ぬまで焦ったって片付かないと書いています。

夏目漱石は、「西洋人のやり方は積極的積極的」と云って近頃大分流行るが、あれは大いなる欠点を持っているよ。第一積極的と云ったって際限がない話だ。」と、近頃は積極的と称する欲深い人が多く、西洋人の代表であるナポレオンやアレキサンダーにかけて批判している。

しかし、それは西洋人だけのことではなく、だれの心にもある、「大いなる欠点」だと思う。お金や財産、地位や名誉などを手に入れたいという欲に際限がない。いったん手に入れてしまうと、もっともっと、とどんどん欲しくなる。自分の心でありながら、心が欲に引きずられてしまうようになるのだと思う。つまり、自分の目標を忘れて欲に支配されて生きていることになる。我意を通して周囲の迷惑など考えずに、際限なく欲し、満足することがなくなるのだ。私がこの一行を選んだのは、私はスポーツに力を入れていて、試合の時は常に「勝ちたい」と思っており、それはいったいどういう気持ちなんだろうと考えたためだ。

わたしが勝ちたいと思う心に際限はないように思う。ただし、そ

こには「大いなる欠点」はないように思う。逆に、勝つことで私に関わってくれた人達に感謝し、その人達の期待にも応えられるのではないかと思っている。

勝つことは欲であり、勝つことに満足はないはずなのに、なぜ「大いなる欠点」がないのだろうか。

スポーツにおける最大の欲、勝つことは自分の内面を高めることに繋がっているからではないだろうか。夏目漱石の言った、「ナポレオンでもアレキサンダーでも勝って満足したものは一人もない」という言葉の中には、自分自身を高める欲というものは感じられず、罪を犯してまでも、欲に踊らされて自分をコントロールできなくなることを「大いなる欠点」としていると思う。

自分を高めることは、心をコントロールし、満足の度合いを高めることに繋がっていると思う。それは欲に踊らされることは正反対なのだ。同じ欲であっても、その意味は大きく違い、自分の心の成長と人への感謝の心を忘れないことが大切だと思うのである。

目的を忘れて欲に引きずられること。これは、アレキサンダーのころから分かっていたことであるのに、なぜ、人間は歴史から学ばず、今までも、そして、きっとこれからも同じことを繰り返すのか、そのような、夏目漱石の嘆きが聞こえてきそう。



『こころ』 夏目漱石

学校法人関西学園岡山中学校 2年

内藤 陽太

作品名『こころ』

選んだ一行

私は死ぬ前にたった一人で好いから、他を信用して死にたいと思っている。あなたはそのたった一人になれますか。

僕が選んだ一行は「私は死ぬ前にたった一人で好いから、他（ひと）を信用して死にたいと思っている。あなたはそのたった一人になれますか。」という「先生」のセリフだ。ではなぜその一行を選んだのか。それは現在の僕に「こころ」というものの本当の意味を教えてくれたからだ。

現在の僕。それはいわゆる思春期と呼ばれている中学生の僕のことだ。もしこの時期を自分の言葉で表現してみると言われたならば僕は「思っても出来ない」と回答するだろう。これは面倒臭い

ということではない。つまりは「素直になれない」のだ。これまで親や兄弟、友人に自分の勝手な言動で迷惑をかけてきた。素直になれば良かった、そう思うことは少なくない。同じく「先生」も僕には想像もつかない程の過去への罪悪感を抱えて生きてきた。そんな現在の僕と「先生」は重なる部分があるのかもしれない。

この一行の中にも二度「死」という言葉が出てくる。死。僕には考える事すら出来ない。しかし「先生」はいつも死を前提にして話している気がする。言葉一つ一つがまるでこの世のすべてを知っているように思える。僕も「先生」のような絶対的な存在が欲しくなった。しかし残念なことに「先生」を含めた人間は万能ではない。「先生」も人間なのだ。そう思うと人間味を帯びて、急に親近感が湧いてきた。

しかし、「先生」は常に「覚悟」というものがあつたと思う。そうでなければこのセリフは出てこないし、人に言うなんてことはしないだろう。覚悟は人間誰しもが味わうことである。しかし「先生」にとっては生きていくこと自体が「覚悟」なのであろう。親友Kを裏切ってまで手に入れた恋人を愛していくのも心苦しかっただろうし、一番の劣等感是人を信じることに對してだと思ふ。人を信用することはまず自分を信用していかないといけないが、「先生」は自分自身さえも呪っていた。それを奥さんではなく「私」に打ち明けた彼は、本当の愛に気づいたのかもしれない。

僕の選んだ一行には、人への「不信」と「信用」の対立した意味

が込められている。それには「先生」の「こころ」の葛藤がうかがえる。この本を読んだ後に人の弱さやもろさを感じた。その反面、人間関係というものの美しさも知った。それら全て踏まえて「こころ」なのだなと思った。

## 《中学生の部》

佳作

### 「先生」の中で生きた漱石

熊本市立錦ヶ丘中学校 2年

田中 鈴那

作品名『こころ』

選んだ一行

私には故郷がそれ程懐かしかったからです。貴方にも覚えがあるでしょう、生れたところは空気の色が違います、土地の匂も格別です、父や母の記憶も濃やかに漂っています。

夏目漱石といえど誰もが一度は聞いたことがあると思う『吾輩は猫である』が有名だが、私は、漱石が出した作品の中でも後期に書

かれた『こころ』という作品になぜかひかれた。この題名を見た時、私は漱石のこれまでの作品と違う雰囲気を感じた。

「先生」が語り手の「私」にあてた手紙の中に、

「私には故郷がそれ程懐かしかったからです。貴方にも覚えがあるでしょう、生れたところは空気の色が違います、土地の匂も格別です、父や母の記憶も濃やかに漂っています。」

という文があった。私はこの一文を読んで、漱石が「先生」を少し自分と重ね合わせているような気がした。

「先生」はまだ二十歳にならない時に両親を亡くしていた。それと似かよっているように漱石もまた、二歳ほどで実の両親と離され、養子に出された。漱石自身も、「先生」と同じような境遇であり、漱石自身が自分自身の事を言っていたのかと感じた。

「先生」は自分で生き方を決め叔父からの見合いを断わり東京に上京してきた。漱石もまた、自分のしたい教科がなく学校を中退し、兄に咎められるのを嫌い学校に通う振りをしていた。この事から漱石も「先生」と同じように自分で自分の道を決め人生を全うしたのである。

漱石にとって、『こころ』は後期三部作の一つでもあり、人生のまとめの作品と言ってもいいと思う。

「生まれたところは空気の色が違います」

と空気の色で表している漱石の独創的な表現は漱石にしか書けない文学作品の象徴とも私は考えた。

漱石が亡くなってから、もうすぐ百年がたとうとしている。それでも作品が愛され続けているのは、漱石が歩んできた人生そのものが作品に表されていて、漱石の溢れるユーモアが読み手を作品の中に連れていってくれる、そんな表現技法が用いられているからだと思ふ。

たった一文でもたくさん感じられる部分もあるが、私も家族と一緒にいられる今を精一杯に悔いのないように生きないといけないと思った。大人になって、初めて離れて故郷の大切さに気付くと思つた。

「『先生』。そして、夏目漱石さん。『貴方にも覚えがあるでしょう』その質問の答えは、これから大人になっていく時、懐かしいなと思えるような日々を歩んでいきたいです。」と、私は二人に伝えたい。



鮮烈な愛のことば

立命館高等学校 2年

左藤 海帆

作品名『三四郎』

選んだ一行

あなたに会いに行っただんです。

「あなたに会いに行っただんです。」ただただ自分の純粋な気持ちを綴った、私の心に深く突き刺さった言葉である。今まで度胸が無く、美禰子との距離感を掴みかねているような態度を取り続けていた三四郎が、初めて自分の素直な気持ちを伝えた場面のようにも思えた。私は、そんな三四郎の言葉に美禰子への愛の一部分を共有したような気さえした。

三四郎は、田舎から出てきて訪れた東京に戸惑っているように見えた。めまぐるしく道を走る電車に、忙しなく動き回る人の波。そして何より、そんなものにまるで頓着せずただ自分の思うままに生きる人々に、憧れていた都会とは違うものを見出したように思

える。そんな中で三四郎の記憶に鮮烈に残った女、美禰子に、彼は振り回されるようにして惹かれていった。

そんな二人が、帰り道を共にする場面である。三四郎は、美禰子に惹かれながらもそれまで何も行動を起こせないままだった。いや、彼なりに工夫してはいたのだろうけれど、どれも決定打になることはなかった。美禰子は相変わらず曖昧な態度を取っていて、彼に気があるような、そうでないような煮え切らない返事しかしない。私なら、そんな態度を取るような人は諦めてしまおうだろう、と考えた。例えばいくら惹かれた人でも、自分の言葉をのりくらりとかわしてしまうような人に、いつまでも構ってはられない。それよりも、潔く新たに惹かれる人を探した方が有意義だ。三四郎たちが生きた時代ならなおさら、早く身を固めることが求められるのだろう。事実、三四郎は母から手紙で結婚の催促を受けていた。

しかし、三四郎はただただ正面から「あなたに会いに行っただんです」と言った。他に用事があった訳ではなく、他の誰に会いに行っただ訳ではなく、単純に美禰子に会いに行っただと伝えた。私は、それが他のどんな趣向を凝らした言葉よりも、熱烈な愛の言葉であるように感じた。美しさを褒めるのでも、立ち居振る舞いを称えるのでもなく、会いたいから会いに行っただと伝えるその言葉は、何にも負けない強さがあると思った。

「三四郎はこれでいえるだけの事を悉くいったつもりである。」愛を伝えた後に口下手な面を見せる三四郎に大きな好感を持てること

るも、私がこの一場面を素敵だと感じた大きな要因なのだろう。

大切な人や愛する人に、自分の素直な気持ちを伝えるというのは、思っているより照れくさくて、難しいことだ。しかし三四郎はそれに臆することなく、正面から美禰子に気持ちを伝えた。私もいつか彼のように気持ちを伝えるときが来るのだろう。その瞬間が私に訪れた時に、私も自分の言えるだけの事を伝えられたら、と思う。例え僅かな言葉だったとしても、それは鮮烈に相手の心に突き刺さるに違いないのだ。

#### 審査講評

正面から「愛の言葉」をつげる強さ。単純かつこれほどまで直截に、「愛の言葉とは」を作品世界から切り取って述べている読者の若さに心打たれる。主人公がヒロインに発したシンパルな言葉の持つ輝きをとてうまく説明している。

#### 《高校生の部》

優 秀 賞

#### 崇高な孤独

東京都立町田高等学校 3年

関口 湧芽子

#### 作品名『野分』

#### 選んだ一行

君は自分だけが一人坊っちだと思いかもしれないが、僕も一人坊っちですよ。一人坊っちは崇高なものです

「崇高——なぜ……」

道也先生の囁きへの高柳君と私の疑問である。道也先生は続けてこう答える。

「君は人より高い平面に居ると自信しながら、人がその平面を認めてくれない為に一人坊っちなのでしょう。然し人が認めてくれる様な平面ならば人も上ってくる平面です。」

つまり、高柳君は他よりも崇高な理想を抱いていると自負しつつも、それを人が認めてくれないがために孤独を感じている。しかし、高柳君の希望は、「立派な作物を出して後世に伝えたい」ことなの

だから、他と同等の理想を持ち、他に認められようとする必要はない。大いなる理想を持って。これが道也先生の教えである。

そして、道也先生は「理想のあるものは迷子にはならない、迷いたくても迷えない」とも唱えている。理想を抱く者の目の前には進むべき道が広がっている。一方、「自分が何をしたいのかわからない」という人間は他人まかせであるが故に、「自己」を喪失し一人坊っちになってしまう。

漱石は、「自己」と「孤独」に魅入られた作家の一人だ。ロンドン留学で、西洋との隔絶感のために神経症に陥った漱石は「孤独」を最も体現した作家である、と言っても良いだろう。そんな漱石が、孤独と隣り合わせで生きている私達の最大の理解者であり、大先生であることは間違いない。

孤独から脱するために息を潜めていると「私」を見失ってしまう。「自己」と「孤独」は切り離して考えることはできない。人と生きるために己を殺す。自分で自分を認められないことこそが本当の孤独なのかもしれない。

他に同調し評価を気にして己の思考を停止させる現代人。私もそんな現代人の一人だ。

周りが楽しそうに笑っているのに私は笑えない。親友と話をしているとも考えが少し違うだけで疎外感を抱く。そして受験。私の孤独はより大きなものとなっていった。そんな時に『野分』を読んで、道也先生は私に「孤独は崇高なものだ」と語り掛けてきた。

例え周りに理解されずとも、己の確固たる意志を磐石なものとする。そうして味わう孤独は崇高なものだ。何も、意固地になる必要があると言っているのではない。これだけは譲れないという支柱のようなものを確立させたいのだ。

孤独を恐れず、大いなる理想を抱き、行ける所まで行こう、そんな強い志を持てるようになるまでの感銘を受けた。

#### 審査講評

小説を自分の中で消化し、自分の言葉で表現している。高い「理想」を追いながら「孤独」や「疎外」に敏感な筆者の、この一行への共感が伝わってくる。

動くために捨てるべきもの

福岡県立小倉高等学校 2年

匿名

作品名『ころ』

選んだ一行

私は信念と迷いの途中に立って、少しも動くことが出来なくなっていました。

「私は信念と迷いの途中に立って、少しも動くことが出来なくなっていました。」

これは先生の遺書に出てくる述懐の言葉である。私は、これが『ころ』の全ての登場人物に共通した性質を指摘しているように感じられた。先生もKも、それぞれが強い信念を持っていた。どんな状況でもその信念が根底にあるようだった。しかし、彼らは決して特別ではなかった。人並みに、むしろそれ以上に、悩み、そして迷っているようだった。この信念と迷いが彼らの人生を重苦しく変えたのだ。彼らが何の信念も持たない人間であったならば、閉塞感

に思い悩み自殺することもなかったのではないか。また、彼らが鈍感かつ傲慢で迷うことを知らなければ、未来は大きく変動するにしろ、これも自殺には至らなかつたのではないか。『ころ』全体に漂う重苦しさと閉塞感の所以はこの一行に隠されていると思う。登場人物は皆、信念と迷いの狭間で動けずにいるようだった。

ところで、この一行が当てはまるのは『ころ』の登場人物だけだろうか。私は、多くの現代人にも言えることだと思う。今日ニュースでよく耳にする言葉に、「いじめは良くないし、困っている人がそばにいたら助けたい。でも、周りの目が気になって、結局何もできないんだ。」というものがある。これは信念と迷いとの間で板挟みに会い、動けなくなった傍観者の言葉だ。このように、先生やKと同じように苦しんでいる人がたくさんいるのだ。現代の若者の自殺の背景にあるのも信念と迷いの間でのジレンマなのかもしれない。

勿論、私もその中の一人だ。私はこの一行を読んだ時、衝動的に自分自身を振り返ってみた。私には、一度きりの人生なのだから自分の才能を最大限に生かせる仕事に就き、人の役に立ちたいという信念がある。しかし、仕事や人のために生きるより、自分だけのために余暇を謳歌する気楽な人生の方が本当に幸せな人生といえるかもしれない、という迷いもある。そのために私は、未だ具体的な進路を決定出来ずにいる。これも、信念と迷いが引き起こす弊害の一つと言えるだろう。

私は、動くために迷いを捨てるべきなのだと思う。自分の信念を曲げるわけにはいかないからだ。迷わない人間などいないし、なろうとする必要もない。ただ動くために、そして信念を貫くために、思い切って迷いを捨てるのが大切だと気付いたのだ。そうすることで様々な問題が解決され、よりよい社会を作れるはずだ。このことは、先生やKの死を無駄にしないことにも繋がるのではないか。私はこの一行に先生やKの自殺の原因を見た。『こころ』の作風を形作る根本的な概念を知った。現代人の抱える問題の解決の糸口を得た。私は、この一行が忘れられないのだ。

#### 審査講評

「信念」と「迷い」を軸にして一気に読ませる。構成力、論理性があり、見事な文章。

#### 《高校生の部》

紀伊國屋書店賞

### 「人間の罪」を乗り越えて

大妻高等学校 2年

酒巻 祐理

#### 作品名『こころ』

#### 選んだ一行

私の鼓動が停った時、あなたの胸に新らしい命が宿る事が出来るなら満足です。

「私の鼓動が停った時、あなたの胸に新らしい命が宿る事が出来るなら満足です。」

物語の終盤、先生が主人公へ宛てた遺書の冒頭部分に位置する一節である。

この言葉の真意を探るためには、まず先生が自殺することとなった背景を考える必要がある。遺書の中で、彼は自殺に至った経緯として二つの重大な出来事を挙げている。一つは、両親の死後、唯一の頼みの綱であった叔父に財産をごまかされたこと。もう一つは、一人の女性をめぐり、親友のKを自殺に追い込んだことである。

私はまず、先生は人間不信と友への罪悪感から死を決意したのだろうと考えた。しかし本当にそれだけなのか。先生の自殺の裏にはより深い何か関わっているのではないだろうか。

遺書の終わりに近いところで、これまでとは印象の違う表現が使われていることに気が付いた。それはKの死後、先生の「心をぐいと握り締めて少しも動けないようにする」、「恐ろしい力」の描写である。彼はこれを「人間の罪」だと解釈した。

先生の生きた、文明開化の時代。それは、以前まで続いていた集団主義を打ち破って、西洋の個人主義が流入してきた時代である。社会・技術の発展に大きく貢献した個人主義だが、それは所詮、外国で生み育てられた「外発的」な主義に過ぎない。それゆえ、世間では本来個人同士の倫理的な相互理解を目指す個人主義を利己主義と誤解する人が現れた。

先生の叔父は、金銭的欲求により、先生を裏切った。Kは、仏教の禁欲的な教えと恋愛感情の間で葛藤した。先生は、親友を裏切ってはいけないという道徳的な義務感と、好きな女性を他人に奪われたくないという利己的な欲求との矛盾の中で苦しみ、結局自らの欲求を優先させてしまったのである。

以上の出来事の引き金となったエゴイズム、これこそが先生の言う「人間の罪」なのだ。人間の「胸の底に生まれてきた時から」潜む根源的な罪なのである。

私は、人間のエゴイズムはそのような「罪」の顔を持つ一方で、

人間の生きる原動力にもなりうると考えている。つまり、必ずしも悪というわけではないのだ。今ここで問われているのは、エゴイズムを如何に排除するかではなく、どのように克服していくかである。先生が主人公に求めたこと、それは彼自身やKのように、エゴイズムを自殺によって排除するのではなく、倫理的義務との矛盾を越えた「新しい命」という形で胸の中に生かし続けることではないだろうか。

先生が遺書に書き残したこの一行は、これから利己主義とないまぜになった個人主義の中で生きていく主人公へのエールであり、警告だ。これは私利私欲の横行する昨今にも充分通じる諫言である。先生の祈る「新しい命」が、現代に生きる私たちの心にも息づくことを、私は切に願っている。

#### 審査講評

「先生」が「私」に対して手紙と生き方を通して伝えたものを論理的に描写できている。人の「心」を深く考え、生きるための警告を発している。



マーブルの空、マーブルの青春

立命館高等学校 2年

宮野 瑛梨

作品名 『三四郎』

選んだ一行

「空の色が濁りました」と美禰子が云った。

「空の色が濁りました」と美禰子が云った。美禰子が菊まつりの人ごみで具合が悪くなって、三四郎と抜け出し小川のほとりに腰掛けて二人で遠くを眺めていた時、色がだんだん変わってくる空を見て言った一言である。私の印象に残った一言でもある。こんな表現は聞いたこともなければ、思いもつかない。憂鬱な感じ…でもなく、それでいて軽いわけでもない。その空を見て、三四郎は「こういう空の下にいと、心が重くなるが気は軽くなる」と言っている。又、「安心して夢を見ているような空模様だ」とも。

空の色が濁る…。たぶん夕立の前でもない、朝方の空でもない、心の中の奥の、奥の遠いところにある空の色。わかるようでわから

ない自分の心、知っているようで知らない他人の心、交ざり合ってマーブルになる。美禰子の気持ち、三四郎の気持ち、他の人たちの気持ち、大きな変化のない中で進んでいく日常にも迷いがあった、孤独があるのだ。そのマーブルの日常こそが言い換えれば、安心して夢を見ている様な、幸せな日常なのだと思えたのであろう。悩み、考え、思い、幾重にも重なり溶け出す日常が。

そんなことを考えながら、今日の空を見てみる。いつもの空だけどこか違って見える。今日はとても空が低い。水彩画のような白とその上から綿を薄くのせたようなグラデーション、切れ間がどこかわからない。湿った風が爽やかに感じられる。美禰子が言った「濁りました」とはこんな感じなのだろうか。違う気もする。私もいつか迷いの中遠い空を見るとき、悩みの中、暗い雲を見るとき、思い出したい。それは誰もが直面する「心は重いが、気は軽い」安心して夢を見ていられる空だということを。マーブルのようにグルグル回る迷いの中にも希望があるということ。

私の青春はまだ始まっていない気がするが、いつか美禰子が何度も繰り返した言葉、「ストレイシープ」を理解する日がくるのが待ち遠しいような、怖いような気持ちだ。「森の女」の絵を見て「ストレイシープ、ストレイシープ」と口の内で繰り返した三四郎はきっとマーブルの青春の中にいたのだ。そしてその渦から抜け出せなくて、遠い空を見上げるのかもしれない。『三四郎』を読んだ後、『こころ』を読んだのだが、それはとても重苦しく、暗く、深い小

説だった。漱石もまた、渦から抜け出せない「迷羊」だったのではないだろうか。まるであの日の空と同じように。

#### 審査講評

「空の色が濁る」という表現の魅力と意味から出発して、人間誰もが持つ「迷い」や「孤独」「安寧」にまで思いを深めている。「マーブルの青春」というネーミングも魅力的。

#### 《高校生の部》

#### 早稲田大学賞

#### 軽 薄

東京都立戸山高等学校 3年

大森 怜美

#### 作品名『こころ』

#### 選んだ一行

私は人間をはかないものに観じた。人間のどうすることもできない持って生まれた軽薄を、はかないものに観じた。

私が選んだのは、『こころ』の主人公「私」が述べた以下の文章である。

「私は人間をはかないものに観じた。人間のどうすることもできない持って生まれた軽薄を、はかないものに観じた。」

これは主人公が故郷へ向かう汽車の中、心に思ったものである。病気を患う自身の父の死を覚悟した主人公は、父の病状を伝える手紙を遠国の兄に書き、矛盾に悩まされる。手紙自体は両親を心配したり、兄の帰省を促したりと感傷的に綴られているのに対し、父に自分は何もしてやれないと分かっている頭は落ち着いて現実を受け止めているのだ。

このような文章が、私の胸を強く打ったのには理由がある。私も主人公と同じような感覚を味わったからだ。

私は夏に父を亡くした。当初は比較的冷静でいられたのだが、次第に感情が抑えきれなくなり、私は他者にそれを打ち明け、愕然とした。自分の発する言葉が嘘くさく聞こえてならない。言葉を組立て、声を出している自分と、それを聞いている自分が乖離していた。自分を傍観している自分の冷めた視線につきまとわれているように話すことが怖くなり、自分に対する訳も分からない怒りに駆られ、身動きがとれなかった。

そうした中で『こころ』を読み返し、先程の文章を目にした時、私は自分の胸に巢食う怒りの正体に気付かされた。私は「純粹」に



なりたかったのだ。悲しいならば悲しみ一色に、苦しいならば苦しみ一色に染まることが誠実さだと考えるのに、膜を隔てて現実を見ている自分が常に傍にいる。そんな軽薄な自分を許せないのに、決して消せない。こんな矛盾を抱えているのは私ばかりと思っていたが、主人公の静かな葛藤は、私のそれによく似ていた。

自分だけではないのだ、という事実だけでも背負っていた荷が軽くなった心地がしたが、私を真実救ったのは文章中の「はかない」という表現だ。「はかない」は切なさ、行き場のない悲しさがにじむ言葉だが、同時に対象への愛情や慈しみの感情が秘められた言葉でもあるように思われる。さらに、この言葉は甘く柔らかい印象を与えるひらがなで書かれている。主人公は自身を苦しめた軽薄を切り捨てるのではなく、受け入れ、共に生きる道を選んだのだ。

私が憎らしく感じた軽薄を、汚らわしいと見なし拒絶した醜さを、主人公は「はかない」の一言で包んでしまう。ひどく優しく深みがあり、ぬくもりに溢れた主人公の言葉が血の流れに混ざり、私の体内を駆け巡る。今日も私は生きていく。人間の生まれ持った、どうすることもできない軽薄を、抱きしめながら。

#### 審査講評

自身の体験と、作品における「私」の父の死を重ねあわせながら、この文章を丁寧読み解き、漱石の言葉を通じて人の儂さと軽薄さを発見している。

#### 《高校生の部》

佳作

#### 夏目漱石『こころ』を読んで

暁星高等学校 2年

甲原 卓実

#### 作品名『こころ』

選んだ一行

しかし君、恋は罪悪ですよ。

「しかし君、恋は罪悪ですよ」。先生は友人Kがお嬢さんを思う気持ちを知っていながらお嬢さんと結婚し、その結果友人Kは自殺しました。先生には友人Kに対する罪悪感は確かにありました。

また、明治初期という時代を考えると、当時の日本語に「愛」や「恋」といった言葉はありませんでした。結婚は家が家を決めるものであり、それを受け入れるのが、たとえ当時の知識人であっても守るべき規範でした。

夏目漱石は、イギリス留学で西洋の個人主義を学びました。「自分の人生は自分で決める。」現代人の感覚では当たり前の事ですが、

当時結婚を自分の意思で決める、ということとは「考えられない」として。実際に、漱石も結局、家が決めた結婚をしています。同時代の森鷗外も、『舞姫』にあるような個人の意思での恋は捨てて、家の決めた結婚をしています。ドイツ留学時代のめくるめく恋は自分で捨てたので、自分の想う人と結婚することは当時とはとても大変なことであり、それはとりもなおさず親を捨て、友人を裏切る「利己主義」と同一視されることだったのでした。『こころ』でも、結局お嬢さんの母親に「許可をもらおう」という形で当時の「家」とバランスをとり、そのことでまた漱石も個人主義と家の間で悩んでしまっていると思います。

すなわち、自分がお嬢さんと結婚することが、友人を死に追いやった罪悪感と、「家」に代表される親や友人を裏切ったという気持ちと、二重に罪悪感を持ってしまった、ということが、「しかし君恋は罪悪ですよ」という言葉に表現されていると思います。

「家」と「個人」の間で悩む明治に比べ、その次の大正時代は「大正デモクラシー」と言われるほど、明治に比べると個人の自由を謳歌できる時代になります。

しかし、個人の自由は西欧の「個人主義」とは似て非なるもので、大正時代の個人の自由は、神との相対する中で個人を見つめてきた「個人主義」とは全く違うものであり、昭和の軍国主義に容易に呑み込まれてしまいました。

現代を生きる自分が漱石のように「自分とは何か、何をすべきか

のか、どう生きるべきか」と考えているとは全く思いません。この夏ほんの少しですが、「恋は罪悪」という言葉で自分自身を考えるきっかけになったように思います。夏目漱石は、恋というものを個人主義の象徴として考えていました。「恋」という言葉を「個人主義」として置き換えてみると、夏目漱石が当時の日本と西洋の個人主義との間で悩んでいたことがわかるような気がします。

### 《高校生の部》

佳作

### 帰れる場所

麴町学園女子高等学校 2年

藤森 瑤子

作品名『坊っちゃん』

選んだ一行

だから清の墓は小日向の養源寺にある。

清が亡くなった後も坊っちゃんは人生を堂々と生きていけるだろう。「親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりしている」としてもこれが、私がこの本を読んで思うことだ。このように感じはじめた

きっかけは、最後の一文だった。

「だから清の墓は小日向の養源寺にある。」この一文を読み終えて、急に肩の荷がおりの気がした。清が亡くなってしまって、坊っちゃんは無条件の愛を失うかもしれない。しかし、清の存在は、清が亡くなった後も坊っちゃんを支え続けるだろうと思った。清は、どんな坊っちゃんでも受け入れてくれる存在だ。

私は、いつも周りを見て焦っている。何となく自分の考えはあるものの、それが周りとは一致しないと不安になって悩んでしまう。結局、自分のことは自分には分からない。そして、自分がどう考え、どう行動するかも自分で決めるしかない。しかし、他人はそれに対して嫌でも評価をしてくる。他人は、その人の価値観で評価する。そう思うと、未熟な自分に不安になり、孤独を感じる。しかし、どう感じるもその人自身の問題で、生きていかなければならないことに変わりはないのだ。

私がそんな心配をしている一方で、坊っちゃんは、不公平やずるい事を嫌い、自分の「正義」を貫いている。松山の中学校に赴任しては、田舎者を馬鹿にし、江戸っ子の誇りを示そうとする。しかし、田舎者は坊っちゃんを馬鹿にしてくるのである。「正義」に反することもするのである。そんな状況でも、坊っちゃんは「正義」を貫こうとする。

中学校の宿直当番でも生徒にからかわれ、困る坊っちゃんは、「正直に白状してしまうが、おれは勇気のあるわりに知恵が足りな

い。こんな時にどうしていいかさっぱりわからない。わからないけれども、けっして負けるつもりはない。」

と、自分の欠点を認めているが、自分を否定することはない。自分を受け入れている。清が、世間に受け入れられない坊っちゃんを受け入れたように。物語の初め、誰からも愛されない坊っちゃんは、唯一愛してくれる清を「気味がわるい」と言っている。しかし、松山に赴任すると、清のことをたびたび思い出し、考える。そして、「正義」を貫くことで、田舎者に対抗する。私は、坊っちゃんが「正義」を貫くことは、「真っ直ぐでよい御気性だ」とほめて受け入れてくれた清への無意識な感謝の表れではないかと思った。結局、教師のいざこざに巻き込まれ、懲りて東京に戻り、「下宿へも行かず、革靴をさげたまま、清や帰ったよと飛び込んだ。」

坊っちゃんをありのままに認めてくれる清がいる。だから、坊っちゃんはこれからも堂々と生きていけるだろう。そんな坊っちゃんが、私を少し支えてくれた。最後の、この一文がそのきっかけをくれた。

## 正しく生きる

サレジオ学院高等学校 2年

末 虎太郎

作品名 『こころ』

選んだ一行

他に愛想を尽かした私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなつたのです。

「他に愛想を尽かした私は、自分にも愛想を尽かした。」それはいいたいどのような心持ちであろうか。

まず、先生は完全に信頼しきっていた叔父に裏切られることで、他人に愛想を尽かしてしまった。このことが先生に暗い陰を落としていることは事実である。しかしながら、「いざという間際には善人であっても急に悪人に変わる」と、叔父は金のために変わったが元は善人であると言っていたことからわかるように、その時点で他人に対する信頼をすっかり失っていたわけではないようだ。実際、大学時代の先生はKとも「奥さん」とも腹を割って話していた。

では、Kを責めた挙げ句、自殺に追い込んでしまった後の先生はどうだったか。他人を信用しなくなった後も唯一立派な人間だと思っていた自分が、恋人を取られないために友人を追い込む。自分も信用できない人間というものの一人だと気づいたときの絶望感はどうに辛いものだっただろう。その後先生は、世の中になつた一人暮らししていると云つた方が適切な生活を続けてきたのである。

一見すると先生は、他人、自分の順で愛想を尽かしているように見えるが、他人を本当の意味で信頼できなくなったのは、自分に愛想を尽かした後ではないか。その証拠として、Kの死の後、先生の性質が変わって行って、他人と付き合えなくなった、との先生の奥さんの言葉もある。自分を信じていた頃はまだ、信用できない、愛想を尽かしたなどと言いつつも他人と付き合っていたのだ。どんなに信用できない相手であっても、話をしたり、意見を求めたりする程度なら、自分のフィルターにかければいいのかから、害はないだろうと。ところが、そのフィルターである自分自身への信頼が壊れると、良い事悪い事の区別を付けることができなくなり、その結果、何もかも信じられない状況になってしまうのだ。つまり、先生は自分を信頼できなくなったことで、他人をも全く信頼できなくなってしまうように私は感じた。

一時の感情で信頼関係を壊して裏切ってしまうなどということは誰にでも起こり得る。もし、自分を信頼できないような状況になったら、誰でも先生のような状態に陥ってしまう可能性はあるのでは

ないか。そして、自分を含め誰も信用できないという孤独感こそが、日本に多い自殺や、通り魔などといった無差別に人へ憎悪をぶつけるような行為に結びついているような気がしてならないのだ。

私たちがこの『こころ』から読み解くべきことは、たとえ他人にばれずに悪事を行えたとしても、自分の「こころ」が知らぬうちに自分自身に罰を与えるのだということである。自分への信頼という最も重要なものが次第に蝕まれていくのだ。自分を信じられず、他人も信用せず生きていく。どんなに金銭的に豊かで優雅な生活ができたとしても、もはやそれは幸せとはいえないだろう。

## 《高校生の部》

佳作

## 人間の本質

サレジオ学院高等学校 2年

水野 直貴

作品名『こころ』

選んだ一行

私は暗い人世の影を遠慮なくあなたの頭の上に投げかけて上ます。

私自身は、まだまだ未熟な高校生であり、この社会、そして人と、というものがいかなるものであるのかということをよく知らない。この部分に関しては、「私」も同じだったであろう。良く言えば純粹、裏を返せば世間知らず、ということにもなる。だからこそ、「私」は、「先生」に向かって直接にその過去を問い質し、「先生」もそれを受け止め、この告白に至るのである。ここにおいて、「先生」は、その死の代わりに、「私」の思想の糧となり、そこで生きることを選んだとも言えよう。

「先生」の遺書を読んだときの「私」の気持ちを推し量るならば、まさに、この箇所にあるように、人の心のいかに利己的であるか、そしてまた、それがいかに普遍的であるか、ということ知らされたことによる一種の諦めのようなものであっただろうと私は思う。だからこそ、この一行が私の心に深くのしかかってくるのである。自己の欲求に囚われ、他人のことなどは自分の視界に入る余裕などないままに、その欲望のままに行動する。それはなにも「先生」の叔父や「先生」のみならず、誰にとっても当てはまるものであり、私も決して例外ではない。

だが、作中の「先生」の行動も含めて、そのことが一概に悪いことであるとはどうも思えない。誰でも、自分が一番大事なのは当たり前のことであり、それが人間の本質であるとも思う。欲するものを諦めて一生涯の後悔を残すほどであれば、たとえ他人を押しつけ



でも、自分の意のままに行動する、というのも一つ正しい選択かもしれない。「先生」も、友人が自ら死を選ぶことさえなければ、ここまで自責の念に駆られることもなかっただろう。しかし、実際に友人は死を選び、「先生」はかつて憎んだ叔父と自分を重ね合わせ、自責と後悔の中で生き続けた。

「先生」は作中において、『私』が真面目だから、自分の過去を伝える」という趣旨の発言をしているが、もちろん一義的には「先生」が「私」を信頼しているという意味だろう。ただ、「先生」も同じく「真面目」な人であった。そして、それゆえに、あるときは騙され、あるときは騙した。「私」が真面目だからこそ、自分と同じ道を辿ることがないように、という意味も含んでいたのではないだろうか。

そういう観点からこの一行を見ると、「先生」の最後の悲痛な願いというものが、私の心に訴えかけてきてならないのである。私自身も、心の片隅にこの一行をそっと置いておくことにすれば、「先生」に対するせめてもの供養になるだろうか。

## 《高校生の部》

佳作

## 魔物のような男

鎌倉女子大学高等部 2年

前場 香奈

作品名『こころ』

選んだ一行

私には彼が一種の魔物のように思えたからでしょう

私の選んだ一文は「私には彼が一種の魔物のように思えたからでしょう」です。この作品は一人の女性に対して一人の男性のその時々で見せる感情の変化や、対峙するもう一人の「魔物」と表現された男性との一人の女性をめぐる心理戦が細かく描写されている作品だと思いました。インターネットが普及し、知らない人とも簡単に交流することができ、友人同士においてもメールで用件を済ませてしまう今日、この二人の静かな、しかし激しい感情のぶつかり合いと葛藤に今の自分を重ね合わせてみると、何と人間関係が希薄になっていくか改めて認識させられました。この作品は大正初期に発表されたものですが、日本が近代化に向けて徐々に歩み始めている

時期で、まだ異性に対して臆病な人が多かったように思います。そんな時代背景の中で、二人の男性が同じ女性を好きになってしまっているのですが、私は、先生が「魔物」と表現したライバルの「結んだ口元の肉が震えるように動いているのを注視し」、予覚がなかったところに「切ない恋」を打ち明けられ、その強さを認識しているだけに、ライバル関係となってしまうKを「一種の魔物のように思えた」と表現しているところに共感を覚えました。その後も様々な駆け引きが展開されますが、「魔物のような」彼の強さを認識しているだけに、一方の彼は相手の心理を読むことに精一杯で、なかなか事態が進んでいかぬことに歯がゆさを感じました。私はまだ恋愛にライバル関係が成り立つ状況になった経験がありません。相手が自分より秀でた女性だったら、やはり「魔物」といいその恋愛は戦わずして諦めてしまいか、早く告白して勝敗を決めてしまいか、またお互い心理戦に持ち込んで相手の出方を見極めるのか私はまだわかりません。しかし私にはないものを持っている「魔物のような」人と戦うのは勇気もあるし、その前に私の心が折れてしまいうので、なかなか行動に移せない状況は理解することができました。彼は精神的にもかなり追いつめられていたのではないかと思いました。しかし「母親」を味方につけ勝利した直後、ライバルの自殺で関係にピリオドが打たれます。この自殺という行為は敗北したこと、劣等感だったのか、また彼に対しての復讐の意味だったのか、その真相を想像しているうちに彼らは結婚したのだろうか、友人の自

殺は彼らの結婚生活に影を落としているのだろうかということが非常に気になりました。いずれにしても「死」を選んだことは少なからず、彼の人生で忘れ去られることはないと思うので死んでもなお彼の心に生き続けるという点においては、やはり「魔物」だったのかもしれません。現在は昼夜関係なく相手の顔を見ずにコミュニケーションがとれる環境にあります。しかしこの二人のように「人間対人間」の関わりを持つことも大切だと思いました。

### 《高校生の部》

佳作

## 生きて行く決心

鎌倉女子大学高等部 2年

矢部 晃子

作品名『こころ』

選んだ一行

私はしかたがないから、死んだ気で生きて行こうと決心しました。

この一行は、「死ぬ」のではなく、「死んだ気で生きる」というと

ところがとても先生らしいと私は思う。なぜならば、先生はKが自殺したのは自分のせいだという強い罪悪感を持ち、自らに嫌悪感を抱いているからだ。

乃木大将の「申し訳のために死のうと思つて、今日まで生きてきた」という書き残しを読んで、先生が、生きていた三十五年間と刀を腹に突き立てた一刹那のどちらが彼にとって苦しかっただろうかと考える一節が後にある。私は前者のほうがよっぽど苦しいと思う。痛みの程度でいえば、刃を自らの腹に突き立てるときのほうがさぞかし痛いだろう。しかし、その一刹那の痛みさえ我慢すればその後に自分が感じることは何もない。この一節の少し前で、先生がいちばん楽な努力で遂行できるものは自殺よりほかにないと感ずるようになったのも、私と同じ考えが先生の頭のどこかにあったからではないだろうか。

その考えを持ちつつ、あえて「死んだ気で生きて行く」道を選択した先生の行動はKへの償いと見てとれるだろう。また自分自身に課した罰ともとれる。

もし、今私が述べたことを先生に伝えたならば、先生は「そんな大層なものではありません。私が自己満足のためにやっているのです。」とおっしゃったかもしれない。実際、先生は先生の語るとおり、人を疑ふことの止められない臆病な人だった。それでいて嫉妬深く、時には相手の弱気につけこんで相手を打ちのめす狡猾さをも持つ。

しかし、そんな先生を私はどうしても嫌いになれないのだ。きっとそれは、私が先生の行動や感情に共感する点が多すぎたからだと思う。すると、先生という人物は実はどこにでもいる平凡な人間だったのではないかと思えてくる。私は、今まで先生の経験したようなことを経験したことがないから、今ここに生きているが、もし私が先生と同じようなことを経験したときに今と同じく生きていられる自信はなく、先生と同じ道を歩むようにしか思えない。

先生とどこにでもいる平凡な人間との違いは、楽な道と辛い道の二つを指ししめされたときに、辛い道を選んだことだ。その辛い道を最後まで通すことが出来なかったとしても、先生は自分で自分を苦しめる決心をするという強さを確かに持っていた。それはまさに現代の人間が持っていない強さであり、また人間として持っているべき強さなのだろう。



『こころ』を読んで

北鎌倉女子学園高等学校 2年

今井 茜

作品名『こころ』

選んだ一行

他に愛想を尽かした私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなりました。

私がこの一行を選んだのは、人は皆、自分が信じられる人やものの存在があることが活動するエネルギー、そして生きる理由となっているのだという事に改めて気づかされたからです。どんなに辛い状況にいても、「これだけは確かに信じられる」というものやことがあれば、それらのために乗り越えようと努力できるものだと思います。

物語の前半では青年と先生の交流が青年の目線で描かれています。先生が自分自身を「他人そして自分すらも信じていることのできない淋しい人間だ」と表現していた場面が私にとってとても印象的で

した。自分の感情、自分がどういう人間なのかを非常に論理的・客観的に冷静にとらえていると感じたからです。その時はただ、先生は割り切った考えを持った人なのだろうとしか思いませんでした。

しかし、後半の先生の遺書を読み終わった時、そうではないことがはつきり分かりました。彼は学生時代、それまで信頼し、頼りにしていた叔父を結婚の問題で信頼できなくなり、善人がふとしたことで突然、悪人になってしまうことがあると悟りました。それが原因で他人を信じられなくなってしまった先生は、後にKとの恋愛問題、そしてKの自殺によって自分のことも信じられなくなってしまいます。それは、どれだけ先生にとって辛かったでしょうか。私自身、他人を信じられなくなったことはありませんが、自分を信じられなくなったという経験はありません。しかしそのことを想像してみると、絶望と恐怖で心が暗闇におおわれるような感覚に襲われます。先生はそのような気持ちをも最も愛する人にすら伝えられなかったのだと思うと、彼の「淋しい」という言葉が本当の意味で心に深く突き刺さってくる気がしました。

他人、そして自分と、信じられるものを全て失った先生の残りの人生は、何かに熱中しようとしても罪悪感に縛られて上手く「動けない」、まさに生き地獄のようなものだったと思います。その「動けない」生き地獄から脱出する方法として、先生は自殺を選んだのだと思いますが、結果としてKと同じ死に方をしたところに、変えることのできない恐ろしい運命を感じます。そして、初めにも書き

ましたが、信じられる存在があることの大切さ、そしてそれが無いことの空虚さを感じました。

私はこの本を読んで、周りの人をどれだけ信じられなくなったとしても、最低限自分のことだけは信じられるように、常に自分に誇れる行動、生き方をしていきたいと改めて思いました。「自分だけは確かに信じられる」と思えることが非常に大切であると、この本から学びました。

## 《高校生の部》

佳作

## ゆめうつつ

北鎌倉女子学園高等学校 2年

日比野 路子

作品名『夢十夜』

選んだ一行

百年はもう来ていたんだな

私は本を読むのが好きだ。ジャンルや書かれた年代を問わず。しかし、どうしても手を出そうとできなかった年代がある。幕末ぐ

らいから昭和初期あたりにかけてのものだ。何となく、そのあたりの文体は硬く、読んでいて肩がこるような偏見を持っており、何となく、本当に何となく敬遠していた。そのため、私が『夢十夜』を読んだのは自ら進んで、ということではない。授業の一環として、いつてしまえば仕方なく読んだのだ。

結論から言うと、何ともあっけなく、私は夏目漱石の夢に吸い込まれていった。読んで間もなく、自分の偏見が崩れ落ちる音を私は聞いた。ふんだんに散りばめられた美しさと切なさ、どのような硬いものがくるのか、と身構えていた私を突き崩すには十分すぎる要素であった。

真白な頬に赤い唇、透き通るほど深い黒眼。決して多くない色で彩られているにも関わらず、なんて鮮やかなのだろう。文章であるのに、まるで絵画を見ているかのような視覚的美しさだ。

次に擬音。ぼうっと、のそり、きらきら、ふっくら。後半になるにつれて、だんだんと増えていっている。この擬音が、切なさや美しさだけでなく、小さな、小さなあたたかさを与えていた。

そして最後の「百年はもう来ていたんだな」という一言。

私は十七年と数ヶ月生きている。百年のたった五分の一にも満たない時間生きていただけでも、この十七年はとても長く感じているのに、百年。百年もの間、女に会うためだけにただ座り、時を刻んでいたのだ。だまされたのではないか、と思い始めながらも、それでも女の言葉通り、再開のためにただただ百年。所詮漱石の見た夢

だが、それでも夢の中で百年待ったのだ。その長いときは来ていた、会えたのだ、と知ったときの安堵と喜びは如何ほどのものだったのだろう。その全てが、この一言に凝縮されている。百年越しの再会に「百」「合」があらわれているのは、きっと偶然ではないだろう。何とも言えない暖かな衝撃に包まれ、思わず目頭が熱くなった。百年越しにしてはあまりにも空虚で、切なく、なんて穏やかな一言だろう。なんだか魔法をかけられて、全てが美しく見せられているように、正に夢見心地の気分になった。

『夢十夜』の一夜目、この一言は読み終えた今でも私をしめつけて離さない。

そうして私は、かけたつもりなどないであろう漱石の魔法に勝手にかかった。幸い魔法（もしかしたらこれが現実なのかもしれない）はもうしばらくとけそうにもない。それならば、もう少しこの魔法に浸り、漱石が生きた年代の文字に手を出してみようか。きっと、魔法がとけるくらいには、それが魔法なのか、現実なのか区別はつかないだろう。

## 《高校生の部》

佳作

## 思い焦がれ、おぼろげ

立命館高等学校 2年

麦谷 志織

作品名 『三四郎』

選んだ一行

「ヘリオトロープ」と女が静かにいった。三四郎は思わず顔を後へ引いた。ヘリオトロープの罅。四丁目の夕暮。迷羊。迷羊。

「迷える子」——ストレイシープ

菊人形を見に行った時、「迷子」を美禰子が訳した言葉。その不思議な響きは三四郎の心を優しく捕らえる。まるで、美禰子の思わせぶりの態度のように。これらの言葉は作中で幾度も使われているが、特に『ヘリオトロープ』と女が静かにいった。三四郎は思わず顔を後へ引いた。ヘリオトロープの罅。四丁目の夕暮。迷羊。迷羊。」の所が印象深く残っている。物語の終盤でこの一節は出てくるが、それまでの美禰子の翻弄により、三四郎はこの場で「迷羊」

の使用に至ったのだろう。

迷子を「ストレイシープ」と訳したことに三四郎は、何故そんな言葉を使うのかと疑問を抱き、二人きりの空間で浮かぶその言葉は、彼の心に居つく。座談していた二人が立ち上がる時、美禰子は小声で「迷える子」と呟く。よろけた美禰子が三四郎の腕を助けにした際も、彼女は「迷える子」と言う。おそらく意図的にこぼれた言葉だろうが、美禰子のその言葉に、息遣いに三四郎は惹かれる。だが、美禰子は別の野々宮という男を想っているようで、三四郎は自分に対する美禰子の態度や、美禰子へ抱く思いに独り迷った。

三四郎は田舎出身で遙々上京してきたが、どうもその暮らしに慣れず、生活に悩んでいた。都会暮らしの中、上手く実を結べないという迷い。曖昧な態度の美禰子への迷い。ただ周りの新鮮な世界に目を向けるのに手一杯の中、彼の迷いを美禰子に「迷える子」として見透かされてしまったかのようだ。思いを寄せている相手から迷える子と言われ、その意図もわからず三四郎はさらに迷いを加速させるのだ。三四郎の迷いに更なるアクセルをかける美禰子という不思議でどこか惹かれる存在。彼女の存在は、三四郎の心を最後まで支配することとなる。

だが、美禰子もただ三四郎をもてあそんでいたわけではない。美禰子は三四郎と共通の知人である野々宮という男を恋慕している。しかし三四郎からは思いを寄せられており、そんな彼を美禰子は翻弄する。思いを抱く野々宮と、思いを寄せてくる三四郎。恋の情が

漂う周囲の異性、それらは美禰子の心中を迷わせただろう。美禰子の粹な様や自由放任な生き方から一見迷いそうにないが、彼女なりの迷いもあっただろう。野々宮でも三四郎でもない男と結婚した美禰子は、式後に会った三四郎にヘリオトロップのにおいをするハンカチを嗅がせる。そのヘリオトロップの匂いは、かつて唐物屋で三四郎が適当ながらにすすめた香水のものである。三四郎の思いを知っているながら嗅がせたのは、美禰子の中で存在していた迷いの表れである。美禰子に未練があるようには見えないが、三四郎だけが「迷える子」ではない、煮え切らない二人の関係、距離感のわけを示しているようである。

美禰子の態度に振り回される三四郎のように、私たちも言葉の真意を知ろうとして奔走する。そんな私たちもまた、迷える子なのだ。

## 未来に託すもの

福岡県立小倉高等学校 2年

遠藤 百華

### 作品名『こころ』

### 選んだ一行

私はその時心のうちで、始めてあなたを尊敬した。あなたが無遠慮に私の腹の中から、或る生きたものを捕まえようという決心を見せたからです。私の心臓を立ち割って、温かく流れる血潮を啜ろうとした。(中略) 私は今自分で自分の心臓を破って、その血をあなたの顔に浴せかけようとしているのです。私の鼓動が停った時、あなたの胸に新しい命が宿る事が出来るなら満足です。

「先生」は強いのか弱いのか。この物語を読むときにはいつも考える。答えはまだ出ない。

中学生の頃は、「先生」は弱いと思っていた。「先生」はKの精神を追い詰めはしたものの、Kの自殺はあくまでKの意志によるもの

だ。恋愛は早い者勝ちだから仕方が無い事なのに、どうして奥さんを残して自殺したのか。本当に奥さんを愛しているなら、Kのことは胸に秘めたまま生きるべきではないのか。

しかし、高校生になってまた読み返してみたら、少し違った考えを持つようになった。

本当に弱い人間に、果たして自殺などできるのだろうかと思ったからというもあるが、最大の理由は、次の一節が目にとまったからだ。「先生」が「私」に書いた手紙の冒頭である。

—私はその時心のうちで、始めてあなたを尊敬した。あなたが無遠慮に私の腹の中から、或る生きたものを捕まえようという決心を見せたからです。私の心臓を立ち割って、温かく流れる血潮を啜ろうとした。(中略) 私は今自分で自分の心臓を破って、その血をあなたの顔に浴せかけようとしているのです。私の鼓動が停った時、あなたの胸に新しい命が宿る事が出来るなら満足です。

この部分を読んで、「先生」には弱いところはあるが、弱いだけの人ではないのだと思った。

「私」は、海水浴場で出会った「先生」に惹かれ、徐々に親交を深め、父の死の際に「先生」からの遺書を受け取る。私には、「私」が最初は見知らぬ他人であった「先生」に懐き、執着する理由が全く分からなかった。「私」が「先生」の過去を暴きたがるのも、単なる好奇心だと思っていた。「先生」も同じだと思う。そこで、罪を告白するにあたって、自分の過去を軽い気持ちでは知ってもらい



たくないという思いを込めて、この文を認めたのだと感じた。

もし自分が人からこのような手紙を受け取ったら、どう感じるだろうか。私の身近に自殺した人はいないし、このような手紙を受け取ったこともないが、非常に重い気分になり、人の過去を暴こうとしたことを後悔するに違いない。まして「私」は、父が亡くなる間に遺書を受け取っている。「私」がその手紙を読み終える頃には、「先生」はもういない。

「先生」は、まだ若い「私」に対して、人生や恋の苦しみといった重たいもの、温かく流れる血潮を浴びせかけることで、同じ過ちをしてほしくないという思いを込め、「私」に未来を託したのではないか。そう考えれば、「先生」はとても強い人でもあるかもしれないと感じる。

## 《高校生の部》

佳作

### 『こころ』を読んで

福岡県立小倉高等学校 2年

米原 美奈

作品名 『こころ』

選んだ一行

私は今自分で自分の心臓を破って、その血をあなたの顔に浴せかけようとしているのです。私の鼓動が停った時、あなたの胸に新しい命が宿る事が出来るなら満足です。

「私は今自分で自分の心臓を破って、その血をあなたの顔に浴せかけようとしているのです。私の鼓動が停った時、あなたの胸に新しい命が宿る事が出来るなら満足です。」

この文章はどういう意味だろうか、と考えたのが始まりである。「先生」の過去に興味を持ち、自分の前に展開してくれ、と頼んだ「私」への「先生」からの返事であろうとまず解釈したが、話が進み、展開を理解していくにつれて、「先生」は「私」の生き方を尊敬し、また、「私」を信頼し、心のよりどころとした上でこの文章



を執り、遺書の一文としたのではないかと思った。

この物語の中で自分なりに読み取った「先生」の人柄や考え方は、落ち着き払っている、必要以上に自分を語らない性分である、自身に対して冷たい、責任から逃げることを良しとしない、ということである。これを踏まえたうえでこの文章を読んでもらうとどうだろうか。必要以上に自分を語らず、自分に対して冷たく、責任から逃げることを良しとしない「先生」はどこへ行ったのだろうか。過去を語り、自分の罪を「私」に白状することで、自分を必要以上に語り、他人に甘えている。すなわち、「先生」の心の中で「私」の存在はそれだけ大きな部分を占めていたということを示している文章なのだろうと思った。また、堅い考えを固持する「先生」に、心に暗い影を落とす過去を語らせた「私」も、若いながらにして、熱意にあふれる人物だなと感じた。

また、暗く冷たい過去を語る前置きとして、このように「新しい命が宿る」という前向きな表現を用いることで、話を読み進めていく読者の明るい期待を裏切る効果もあるのではないかと思った。ふつう、「新しい命が宿る」などという文面を見ると、誰もが明るい未来を想像し、思い描くであろう。しかし、後ろに「先生」の性格が今のように冷たいものとなってしまった暗い過去を持ってくることで、良い意味でも悪い意味でも読者の期待を見事に裏切ることに成功している。

この本を読んで、人の死と生について深く考えることができた。

「私」の父の死やKの死、また反対に人間の血の勢などという言葉も出てくる。この矛盾がこの作品の味わい深さを演出しているのではないかと思った。あまり触れることのない生と死にこの本一冊で触れることができる、そんな一冊ではないかと思った。これが夏目漱石が日本を代表する人気作家たるゆえんであろう。